

星空より、あこがれの人へ

旭川市立永山南中学校 一年 長尾 果乃子

私には、三つ上の姉と、四つ下の弟がいます。姉は、何でも一つ先にいる、あこがれです。自分とは正反対で、自分ができないことができる人です。一緒にいると、元から少ない生気を吸われるような関係ですが、仲良く暮らしています。

姉は、朝、一番最後に起きます。本人曰く、

「早く起きても、それから学校に行くまでの時間がロス」らしいです。それから、よく、くつ下をイスの下にぬいで、そのまま放っています。まれに、三日分ほどたまっていきます。一番困るのは、ベッドです。私と姉は、二段ベッドを使っていて、姉は下を使用しています。ラジオを流したまま、夢の世界に行ってしまいます。大事なことなでもう一度。ラジオを流したままです。さらに朝は、アラームが止みません。気付いていないのです。いえ、気付いていても止めないのです。少し苛立ったので、次の日、アラームを止めずに、ベッドから出ました。十分程すると、自動的にアラームが止まりました。姉は、ぐっすりでした。私があこがれているのは、こんな姉です。何故あこがれるのでしょうか。

姉は農業高校に通っています。クッキーを持って帰ってきたり、とうきびを持って帰ってきたりします。地震により停電した日、姉は、「冷凍庫止まった。どうしよう、学校の方はアイス入っているのに。」と言いました。アイスの心配できるくらいなら大丈夫だな、とながめていました。他のことを心配できるのは、すごく、あこがれます。

私と姉の仲の良さは、無断で部屋に入ったり、おそろいでバッジを買ったり、一緒に買い物をしたり、ジャンパーが色違いだったり、といった具合です。よく仲が良いと言われますが、自分が姉を追っただけです。と、いいたいのですが、バッジを買おうと言ったのは姉ですし、買い物や映画にささうのも姉です。こんな、「友達」みたいだけど、ちゃんと、「姉妹」をしている関係が、仲の良さの理由かな、と思います。それでいて、姉という上にいる人だからこそ、同じ空気を自分よりも三年分多く吸った人だからこそ、あこがれてしまうのかなと思いました。

「なんでそんな人にあこがれているんだ」と言われました。自分でも不思議です。

こんな、阿呆で愚図であこがれるよりも世話の焼ける姉です。妹が言うのもためらわなくらいのろくでなしです。何せ、似ている動物がナマケモノです。二十四分の一の力で動いているのです。自分の頭をかち割って何故こうなってしまったのか知りたい程です。地震だって、自分の心配をしないような人です。将来、この人は働けるのだろうか。小学生のころ、ネズミの死体をながめて学校に遅刻するような人なんだと、姉の未来が心配です。

二〇一八年九月六日、平成最後の九月六日、午後七時。姉と二人で、屋根の上にいました。外灯の無い、星の美しい夜でした。天の川は見えませんでした。今までに見たことのない程の無数の星が輝く、星の砂浜を見上げていました。そこで、ふと気が付きました。こんな、小さくて、はっきりとしない、沢山の夢を、姉は持っていて、自分は、それにあこがれたのだと。荒っぽい幸せじゃないんだ、この人が求めているものは。そう思って、さらに輝いて見えました。同時に、どこまで自分を置いて行くのだろうか、不安になりました。でもきつと、この人が、この夢の粒を捨てない限り、自分はこの人にあこがれ続けるのだ、と思いました。

私の姉は、阿呆で、ろくでなしで、どうしようもない人で、星をいくつも持っています。そんな姉は、私をあこがれます。